淨瑠璃坂の討入（第六回）

高田　友

（二十五）

「紫の一本（ひともと）」（戸田茂睡／一六八二）なる地誌には左の如くに描かれたり。

源八生年（しやうねん）十六にて、容顔殊にすぐれたるに、こぼれかかりたる前髪は、みるふさ（海松）のごとくなるに、色めく花の振袖は、吹く春風にひらめきて、たきこめたりし伽羅（きやら）の香は、敵の袂も匂ふらん。

（二十六）

隼人父宗彌は見事に討取りたりけれど、要（かなめ）の隼人、屋敷の中（うち）には見出すを得ざりき。さは、近隣の知己が家を訪れて碁を打ちてありしとの由。

寔（まこと）は家にありて、潛晦（せんかい）せりと言ふもあり。

いづれならむとも、父討たれたりと知る時、もはや逃るる能はずと腹を括りたりけむ。一人臆して命を全うしたらむには、幕命死を賜はらむは必定なり。

去り行く一行を隼人は追驅せり。率ゐるは殘存せる者悉皆、大略二十名に及べるか。

捉ふるを得たるは「牛込土橋」（牛込御門）。如今、飯田橋驛前の惣堀に掛りたるならむかと思はるるが、定かならず。

夜は白々と明け初（そ）めて、彼我（ひが）の人影いや氣爽（けざや）けし。をりしも陽炎東（かぎろひひむかし）の空に立ちて、明星（あけぼし）の消えなむとする、豈（あに）天の我が孝養（きやうやう）を嘉（よみ）したまひけるにあらずや。

まづは隼人方より征矢（そや）を射掛け、斬り合ふや暫時、隼人の川に落つるあり。

以是（ここをもつて）、源八、橋の上より槍を突き出して敵（かたき）を仕留む。

已而（すでにして）、寛文十二年（一六七二）如月三日の朝を迎へたりけり。

（二十七）

半月を經たる十九日はすなはち先君（忠昌）の祥月命日なれば、法事を行ひたりけむ。翌二十日、源八、櫻田門を出でたる井伊家上屋敷へ出頭せり。伴ひけるは奥平傳藏および夏目外記なりき。

これを裁きたるは大老井伊直澄、徳川四天王に數へらるる直政の孫なりき。而して幕末の井伊直弼は直澄弟の末裔なり。

直澄怡（よろこ）びて之を迎へ、三人（みたり）を讃へて「義士」と呼ぶ。

（二十八）

幕閣の評定、當初は悉く切腹を命ずべしとのとの大勢に傾きけれど、直澄一同の爲に馳走せるに由りて、死一等を宥められ、三人は伊豆大島配流と決せらる。加之、各〻中間両名を伴ふを許されたりとは寛恕の沙汰といふべからむ。且つは亦、流人なるに帯刀お構ひなしとの恩典に一同涙なくしてあるべしや。

大島に著するや、元服加冠の儀を行ふ。時に源八二八の春。振袖装束花も羞らふ美丈夫なれば皆々月代を剃るを惜しみて延引し來りしなり。

此年七月、馬鹿殿昌能卒去す。

嗣子なければ御家斷絶とは江戸の定法なれど、これまた神君家康公の御連枝（女系子孫）なるを以て特例あり。末期養子の儀承引ありて、妹アキの福江藩主五島盛勝に嫁ぎて成したる昌章これなり。

（二十九）

井伊直澄は、これが討入に感ずるに餘ありたりけむ、大島なる三人に、困窮する所なかれかしとて食餌狹衣荒物の類を贈れるヿ常なりき。

片や奥平家は酷薄冷澁以て慨嘆すべく、一筆安否を問ふだに之なかりき。

延寶六年（一六七八）、源八二十一歳、赦免の下知到る。三人さながら江戸に戻るを得たり。大老直澄は既に両年の昔に逝世してありしかど、新藩主（養子／兄の子）、養父の遺志を受け繼ぎて優渥なる處遇を與ふるに至る。

その後、いづれもいづれも彦根に移りて、井伊家に仕ふ。百石ないし二百石を給せられ、後に三百石に出世したりとさへ傳へらる。

元祿十五年、赤穂浪士の討入出來す。この砌、源八四十五歳。これが消息に接して如何なる思ひにか浸りたりけむ。

（令和八年五月十五日受附）